

# 文豪の遺言

## 第六回



木内是壽

### 太宰治

明治四十二年、青森県北津軽郡金木町の県下屈指の大地主津島家に生まれる。父は貴族院議員、長兄は戦後に衆議院議員と青森県知事を歴任。東大仏文科中退。小説家。本名津島修治。

昭和十年の第一回芥川賞で「逆行」が次席となつて文壇に登場する。「道化の華」では、従来の客観描写の外側に一歩踏み出した、作者自身の告白をつづるといふ小説形式をとり、当時の文壇にきわめて新鮮な印象を与えた。爾来、井伏鱒二を師と仰ぎ、脱落者としての罪障感・自己破滅的な芸術意識を、独特の説話体に移して「ダス・ゲマイン」(「二十世紀旗手」)などを発表して文壇に新風を送った。戦時中は、聖書の研究・西洋近代知性の追求に努め、「走れメロス」など人間信頼の姿を描いた。戦後、疎開先の青森から帰ってくる、一躍流行作家としてデビューして多くのファンを捉えた。しかし、再び破滅的傾向をみせ、「ヴィヨンの妻」「斜陽」「人間失格」など、自虐的・

自己崩壊的作品を残した。端的にみて彼の文学は、孤高・反逆の精神を根底に、一種の「敗北の美しさ」を示したものである。また、太宰作品の内容と文体は現代においてもなおその新鮮さが失われることなく、若い文学志望者などのよき指針となり、「太宰治は私だ」と告白する若者は多い。

代表作の一つの「斜陽」は、モデルの太田静子の「斜陽日記」と農地改革で没落する青森の実家を重ね合わせたもので、「滅びの宴」をつづったこの作品は、「斜陽族」という流行語までも生んだ。なお、彼女との間に太田治子(小説家)が生まれている。あらずじは、数年前に結婚が失敗した二十九歳のかず子は、没落貴族として、今は母とともに伊豆の山荘で世を送っている。そこへ弟の直治が南方から復員してくる。彼はデカダンの作家上原のとりまきとなり、上京して退廃的な生活を重ねる。弟のことで上原に接近したかず子は、いつか、「道德革命」の願いとして上原の子を宿すことを夢みるようになる。受胎した彼女は、上原の子を生む喜びに新たな生きがいを見いだす

のである。

「人間失格」は、ある狂人の生涯に仮託して、己の生の不安と苦悩に人間存在の本質を描いた作品である。この作品が時代を越え、読む人間の魂を揺さぶり続けるのは、社会から葬られ、敗北していく過程を描いた作者の反逆の魂が作品に転写された芸術的自叙伝といわれる代表作であるからだ。あらずじは、道化を装った多感な少年葉蔵が、友人の予言にしたがって上京し、恐怖感をまぎらすため、酒、煙草、売春婦などさまざまな遊びを覚えたとともに、「日陰者」意識を好んで、非合法活動にはいる。生活は苦しく、仕事は多忙で、ついに女給と心中をはかるが、自分だけが助かり、生き方が変貌する。一流の絵描きでなく、春画家になり下がった彼は、淫靡で退廃な生活を重ね、再び自殺をはかるが未遂に終る。不義を働き、モルヒネに酔い、荒廃した日々を送る彼を、友人たちは脳病院に送りこむ。退院後、東北の海辺のあばら家で廃人となった二十七歳の葉蔵には、幸福も不幸もなく、「ただ、一さいは過ぎて行きます」

と告白せざるを得ないのである。

昭和二十三年五月に「人間失格」を脱稿し、朝日新聞の連載小説「グッド・バイ」の執筆を始め、翌月の六月十三日深夜に山崎富栄と玉川上水に入水自殺。十四日、仕事場になっていた富栄の下宿先の部屋に、間に合わせの仏壇に二人の写真が飾られ、そこに美知子夫人宛、小料理店「千草」の鶴巻夫妻宛、出版雑誌社宛、友人宛の遺書が置かれているのを家主野川アヤノが発見。十九日早朝に遺体が発見され、「千草」の土間にて検死のうえ、即日火葬にふされた。享年三十九歳。

家族は、美知子夫人、長女園子、長男正樹、次女里子（小説家津島佑子）。なお、太田静子との間に認知の子・太田治子がいる。

「津島美知様」と記した封筒には、毛筆の大きな字で書いた半紙九枚の遺書が入っており、その中の一枚には、

いつもお前たちの事を考へ、そうしてメソメソ泣きます。

と書き、最後の九枚目は、

美知様

津島修治

お前を誰よりも愛してみました

とした。書き損じた三枚の反古もまるめて部屋に残した。その中には、こんな一部もあった。

子供は皆、あまり出来ないやうですけど陽気に育ててやって下さい たのみます

あなたを きらひになったから死ぬのでは無いのです

小説を書くのがいやになったからです

みんないやしい欲張りばかり

井伏さんは悪人です。

この遺書の中の「井伏さんは悪人です。」の記載は、太宰と井伏鱒二氏との関係を知る者には意



外感がある。太宰の師であり、美知子夫人との仲人をつとめ、世間では太宰の後見役と目されていた井伏氏は著書「太宰治」の書き出しに、「私と太宰君の交友は、表向きでは竜頭蛇尾に終った感がある。」と述懐しているように、晩年近くの太宰は井伏氏と疎遠の関係にあったようだ。井伏氏を中心とする文学者の仲間から、戦後、年少の太宰独りが流行作家として喝采を浴び、先輩たちとの気まずい関係から集会も敬遠するようになっていた。昭和二十三年一月一日、井伏宅へ恒例の年始に向くのを太宰は気が進まなかった。しかし美知子夫人にうながされて長女園子を連れて井伏宅へ行ったが、つらく口惜しい思いをして帰ってきて茶の間で泣いている。みんなが寄ってたかつて自分をいじめると。文学者仲間との軋轢は、この年始の時にはじまったわけではない。前々から太宰の胸の中にくすぶっており、誰にでも明かせる苦悩ではなく、話せる愚痴ではなかった。太宰はこの年の一月八日の仕事始めに執筆した「美男子と煙草」の中で、先輩や知友たちとの相容れない心情を語り、正月の井伏宅での気まずく悔しかったことを織り込んだ。「古い者は、意地が悪い。何のかのと、陳腐きはまる文学論だか、芸術論だか、恥かしげもなく並べやがって、以って新しい必死の発芽を踏みにじり、しかも、その自分の罪惡に一向お気づきにもなつてをらない様子なんだから、恐れ入ります。」と。入水自殺した当日に山崎富栄が綴った日記には、「修治さんは肺結核で左の胸に二度目の水が溜り、このごろでは痛い〜と仰言るの、もうだめなのです。みんなしいじめ殺すのです。いつも泣いてみました。豊

島先生を一番尊敬して愛しておられました。」と、記している。小説家豊島與志雄氏は無欲で気負いのない人柄として太宰から信頼され、葬儀に際して葬儀委員長をつとめている。また、愛弟子の堤重久氏が著書「太宰治との七年間」の中で太宰の語り草を書いている。「それに、井伏さんはひどいよ。可愛ゆげがないから、美知子と別れるとうんだ。お前、ひどいと思わなかね。自分が世話したくせにさ。それ以来、おれはね、井伏さんを信用しないんだ」と。美知子夫人はのちに、「回想と太宰治」の中で、井伏夫人の母堂が井伏氏のことを、「何せ、馬に狐をのせたような人でございすからね」とおっしゃった、とわざわざ書いてるように、太宰家での井伏氏評判は悪かったようである。

自宅近くの小料理店「千草」の二階一室を借りて仕事場兼出版関係者などの接待場所として利用していた。経営者鶴巻夫妻宛の遺書は太宰と山崎富栄の連名となっている。

永いあいだ、いろいろ身近く親切にして下さいました。忘れません。おやじにも世話になった。

おまえたち夫婦は、商売をはなれて僕たちにつくして下さった。お金のことは石井に 太宰治

泣いたり笑ったり、みんな御存知のこと、末までおふたりとも御身大切に、あとのこと御ねがいます。誰もおねがい申し上げるかたがございません。あちらこちらから、いろいろなおひとが、みえると思いますが、いつものように、おとりなし下さいまし。

このあいだ、拝借しました着物、まだ水洗いもしてごさいませんの。おゆるし下さいまし。着物と共にありますお薬は、胸の病いによいもので、石井さんから太宰さんがお求めになりましたもの、御使用下さいませ。田舎から父母が上京いたしましたら、どうぞ、よろしくおはなし下さいませ。勝手な願ひごと、おゆるし下さいませ。

昭和二十三年六月十三日

富栄

太宰治に魅せられ「運命の女性」になった山崎富栄は、日本で初めての美容専門学校「お茶ノ水美容学校」を創設した山崎晴弘氏の二女として大正八年に生まれる。長女が三歳のとき夭逝したため、父の後継者として育てられた。才媛だった彼女は、世界的美容技術の取得には語学が不可欠だとする父のすすめで、十七歳のとき、日本大学附属第一外国語学校に入学し、翌年にはY・M・C・Aに入学、語学を専攻し、欧米文化の基礎となっている聖書の研究にも励んだ。二十歳でお茶ノ水美容学校の校長助手に就任。学生数は三百人余りで、校舎は四階鉄筋コンクリートの威容である。昭和十五年、校舎が陸軍に接収されたため、木造の新校舎を本郷一丁目に建設する。

昭和十九年の二十四歳のとき、児童文学者土家由岐雄（代表作「東京っ子物語」と三井物産社員で茶道華道の師匠でもある飯田富美の紹介で、三井物産社員奥名修一と結婚する。しかし僅か十二日間の新婚生活ののち、マニラ支店へ特別機で飛び立ち、間もなく現地で召集されて戦死する。

昭和二十年三月十日の東京大空襲で学校は焼失し、家族は母信子の実家がある滋賀県八日市町に

避難する。

昭和二十一年四月、義姉つたと鎌倉長谷でマ・ソール美容院を経営、同年秋、お茶ノ水美容学校の卒業生塚本サキの要請で三鷹市のミタカ美容院に移り、英語が話せる富栄は進駐軍将校夫人専用の美容室に派遣された。塚本サキの紹介で彼女の旧友である野川アヤノ方に下宿することになった。偶然であるが、太宰が仕事場などに利用していた小料理店の「千草」とは斜め向いの家であった。この年の十二月、戦後第一回の美容コンクールに富栄は三多摩地区代表として出場している。

父晴弘はお茶ノ水美容学校の再建に奔走していたが、公職追放となつて計画が挫折したため、再建は富栄に期待し、彼女を戦後美容界のリーダーに育てようとした。

富栄は、ミタカ美容院の同僚今野貞子から、弘前高校から東大受験の勉強中に病死した次兄年一と同じ歳で同じ学校を卒業した作家が近くに住んでいるという話を聞いた。富栄は、その作家が兄のことを知っているかもしれないと思い、今野にその作家を紹介してくれるように頼んだ。昭和二十二年三月二十七日、二十七歳の富栄ははじめてその作家太宰と会った。場所は三鷹駅南口の屋台のうどん屋であった。しかし太宰から次兄年一の話は聞けなかった。年一が早生まれで学年が違い、太宰とは面識のないまま卒業していた。それでも今野も交えた会話ははずんだ。その夜の太宰の印象を富栄は日記に書き残した。

「今野さんの御紹介で御目にかゝる。場所は何と露店のうどん屋さん。特殊な、まあ、私達からみれば、やっぱり特殊階級にある人である——作家



といふ。流説にアブノオマルな作家だとおききしてゐたけれど、第一印象は違う。先生に御逢ひしながら著書を一冊も読んでゐないといふことは恥しかったけれど、知らざるを知らずとせよの流法で御一緒に箸をとる。貴族だ」と御自分で仰言るやうに上品な風采。」

このほかにも太宰は、初対面の富栄を相手に当時の政治、社会、文化、世相を批判し、自分の考えや悩み、そして心のうちまで「情熱的に」語ったようだ。早速、「貴族だ」と自称し、「現在の道徳打破の捨石になる」と強がりを行い、十字架を背負った「キリストだ」と悲壮ぶって富栄の気を惹いている。富栄も自分の周囲では得られない知的な会話や情熱的な語り口、ナルシズムの口説きにすっかり酔わされてしまったようである。回を重ねて太宰の話聞くうちに富栄は「私の一番弱いところ、真綿でそっと包んで、も似たものを、鋭利なナイフで切り開かれたやうな気持ち」に魅せられていった。富栄にとってははじめて心を奪われた恋の相手であった。相手の泣き所を殺し文句のナイフで突きさすのが太宰の得意技だった。

「死ぬ気で恋愛してみないか」と手練の太宰に誘われ、恋をし、有能ゆえに太宰に頼られ、秘書の雑務をこなし、当時の金額で二十万円の自分の貯金をはたき、病んで血を吐きながら書く太宰を看護し、泣き言をいわず、死をいとわなかった富栄であった。

太宰と富栄の入水自殺があつてから、後を追う六十人もの者が玉川上水で自殺したといわれるが、当局は報道を抑えた。また、弟子の小説家田中英

光は太宰の墓前で自殺した。

太宰の死後、筑摩書房からの全集総発行部数は四〇〇万部を超える。新潮文庫「人間失格」は一〇万部、「斜陽」は三二万部、「晩年」から「ろまん燈籠」まで十七冊の総発行部数は一八五〇万部をこえるロングセラーを続ける。ちなみに平成九年に八十五歳で亡くなった美知子夫人の課税遺産額は公示で約九億四千万円で、新聞に、遺産は「長女園子さんと次女で作家の佑子さん、園子さんの夫で衆院議員津島雄二氏ら四人が相続した」と報じている。

追悼において豊島與志雄は、「太宰治との一日」という文にして、「死は、彼にとっては一種の旅立ちだったろう。その旅立ちに、最後までさっちゃんが付き添ってくれたことを、私はむしろ嬉しく思う。」と、富栄に感謝している。「さっちゃん」とは、太宰が名付けた富栄の愛称である。

### 国木田独歩

明治四年、千葉県銚子に生まれる。幼名は亀吉、のちに哲夫と改名。東京専門学校（早大）中退。詩人、小説家。判事補の父が広島、岩国、山口と転勤するにともない、転校を重ねるが、中国地方の特色をもつ山紫水明によって诗情が養われたことから、自然との対話に深くめざめた詩人ワーズワスに傾倒する。

二十一歳のとき、植村正久より洗礼を受ける。この年、徳富蘇峰創設の民友社系の団体である青年文学会の運営に携わる一方、「文壇」の理事と

して編集に当たるなど、八面六臂の活躍をする。翌年の青年文学会の会合での徳富蘇峰との出会いが、独歩のその後の人生の方向を決定づけることになった。

二十四歳（明治二十七年）のとき、日清戦争が勃発する。独歩は徳富蘇峰の国民新聞社に入社し、従軍記者として五ヶ月間、主戦艦の千代田艦に乗船し、国民新聞社に戦況を送稿した。独歩の報告は、大連湾進撃、旅順攻撃、威海衛大攻撃などの日清戦争史に残る海域の戦場場面を生々しく報道するだけでなく、軍艦内の日常生活まで興味深く観察した通信記事を送り、無味乾燥になりがちな軍事通信に終らせずに読者の血をわかし、一躍国木田哲夫の名を広く知らせることになった。のちに「愛弟通信」と題され単行本にまとめられ、作家への道の第一歩を踏みだした。

翌年、呉に帰還すると、独歩の文才を高く買った蘇峰からの要請で、民友社の総合雑誌「国民之友」の編集者となった。文芸欄には森鷗外、尾崎紅葉、幸田露伴、坪内逍遙、二葉亭四迷ら明治二十年代の文学界の大家から新進作家までが寄稿し、文学史上、大きな役割を果たしていた。独歩は、当時の文壇第一の文芸雑誌に編集者の立場を利用してしばしば筆をとることにより、小説家として腕を磨くことができたのは幸運であった、と後年になって述懐している。

この年の六月、芝区三田の佐々城家から国民新聞、毎日新聞の従軍記者たちが招かれ、晩餐の機会をうけた。主人の佐々城本支は日本橋で病院をもつ医師で、夫人の豊寿は日本キリスト教矯風会の幹部で社交的な人であり、ハイカラな洋装

をした新しい女性であった。この晩餐会には信子という娘も顔を出し、歌を歌って記者たちを歓待した。上流社会の晩餐会と人前でも物おじせず、歌う少女は、地方出身の独歩にとっては初めて知る世界であった。独歩が日頃書きおいた日記「欺かざるの記」には、このときの様子を、「其の時はじめて其の令嬢を見たり。宴散じて已に帰らんとする時、余、携ふる処の新刊家庭雑誌二冊を令嬢に与えたり。令嬢年のころ十六若しくは七、唱歌をよくし風姿素々可憐の少女なり」と記している。

以後、独歩は佐々城家にしばしば出入りするようになり、信子との交情は次第に深くなっていくところか、二人の仲は佐々城家の反対が火に油を注ぐように燃え上がった。当時の新聞記者はならず者扱いされ今日のように社会的地位は高くなく、誰の目にも独歩が上流社会の令嬢と結婚するにふさわしい男とはいえなかった。二人は汽車と自動車で武蔵小金井の橋畔まで行き、人影のない武蔵野の林を互に腕を組んで散策した。のちに、これが素材となり、独歩の代表作「武蔵野」が生まれるのだった。十一月、信子は勘当同然となるが、徳富蘇峰らの奔走により結婚にこぎつけ、神奈川県逗子で新婚生活を始めた。当時、独歩の父が失業して東京に住んでいたため、経費節減から翌年の三月に東京の両親と同居することになった。新婚生活を夢見た信子にとっては、あまりにもの貧乏生活に耐えられなかった。四月十二日、信子は教会からの帰り道、従妹の星良子（のちの相馬黒光）の家へ行くと行ったまま失踪した。信子失踪当時の独歩の様子を相馬黒光は「黙移」に著して

いる。

「それからの独歩は狂気のやうでした。彼方へ走り此方へ走り。知己朋友のところを尋ね、果ては信子が好きだといっている染井の墓地まで行って、弟の墓の前に倒れて死んでゐるのではないかと探したり、私のところへは端書でもきてゐるかと思ひ二度も聞きに来るといふ風で、私はその顔蒼ざめ、眼の血走った独歩を見ると一緒に泣けてしまふのでした。（中略）兎も角二人を会わせて見ようといふことになり、とう／＼『信子は浦島病院にゐる』ということを知り、信子は『浦島病院にゐる』と力を得て病院に行つて見ると、信子は病床に居り、顔は蒼ざめ、髪はみだれて、食事も通らぬらしく、あまりに哀れに変わり果ててゐました。一つ違へば信子を殺して自分も死ぬつもりで独歩はふところに何か用意してゐたといふことですが、信子のこの様子を見てさすがに手を触れることができず、会話はきわめて静かに終りました。そして信子が離婚の意志を捨てない

ことが分かったと、はじめて独歩の胸に悲痛な諦めの心が宿りました。」

独歩は離婚届を媒酌人の徳富蘇峰に手渡した。これで独歩の恋は無残に破れたのである。

彼の作品「鎌倉夫人」は離婚後に再会する信子がモデルである。有島武郎の出世作である長編小説「或る女」の主人公葉子は、離婚後放縦な生き方をした信子がモデルとして書かれている。

この時期、独歩は「国民之友」の編集から離れ、「少年伝記叢書」の執筆に没頭しており、「フランクリンの少壮時代」など計八冊が彼の手によって書かれた。小説の分野でも「非凡なる凡人」の主人公が座右の書として「西国立志編」（スマイルズの自助論）であるように、これらの著書は少年たちの立志の啓発を目的とするもので、いつの時代にも独歩ファンがいて彼の声価を高らしめる要因となっている。

独歩にとって信子を失うことは大きな痛手であったが、この試練を経て文学への道をまっしぐらに歩みはじめるのである。独歩の気持ちが落着き

## 武蔵野

国木田独歩



はじめた頃、田山花袋、柳田国男らと知り合うことになる。

二十七歳（明治三十年）の四月、独歩は小説を書くため花袋とともに日光の照尊院にこもり、そのとき執筆したのが処女作「源叔父」で、作品は「文芸倶楽部」に掲載され、小説家国木田独歩の誕生となった。

この月、ワーズワスの影響をうけて八十数編の詩を発表していた独歩が中心となり、田山花袋、柳田国男、太田玉茗、宮崎湖処子、巖崎野屋お室らと詩集「抒情詩」を「民友社」から刊行した。

翌年、弟収二が借家している家主の長女榎本治子と知り合い正式に結婚する。

三十一歳（明治三十四年）のとき、雑誌に掲載された十八篇の小説を収めた「武蔵野」が民友社から出版された。小説家国木田独歩としては処女出版である。しかし幸田露伴や尾崎紅葉らの作品に慣れ親しんでいた読者層には、ワーズワスに導かれた彼の詩情と清新なリアリズムが理解されず不評であった。独歩が世に認められるのは、明治三十九年に出版した「運命」によってである。この頃から独歩は小説家として世に知られるようになり、「武蔵野」が再評価されることになった。

「武蔵野」は、武蔵野の自然を風景描写するにとどまる作品ではない。落葉の音、時雨のささやき、梢に鳴く小鳥の声、三条に分かれる道、すべてそうした自然の中に人生を見る独歩の目が光っているのである。たった一本の木を見ると、人間の運命を冥想するワーズワスの自然観を受けついで独歩の自然観が最もよく表われた作品である。

独歩は近代短篇小説を開拓し、すべてが短篇小

説で、その数は七十三篇である。その中の「運命」は独歩の文壇的地位を確固のものとし、「破戒」を刊行した島崎藤村と並んで新時代における文学の旗手として読者に受けた。

独歩は明治三十五年に矢野竜溪の依頼を受けて日本で最初の画報の編集をまかされ、存分に才能を発揮した。日露戦争のときは特派員を戦地に派遣し、生々しい戦況を画報で報道して読者は増える一方であった。だが日露戦争が終結すると売れ行きが悪くなって経営が苦しくなった。そこで独歩はこれを挽回しようとして明治三十九年に社の権利を譲り受け自ら独歩社を起した。しかし引き継いだ借金が予想外に多く、悪戦苦闘の末に明治四十年四月に倒産した。この倒産で身心は極度に疲労し、結核に冒された。田山花袋、島崎藤村らの友人は「二十八人集」を作って独歩に贈った。独歩は友人たちの友情に茅ヶ崎の南湖院の病床で泣いた。

明治四十一年六月二十三日死去。享年三十八歳。遺族は治子夫人、長女貞、長男虎雄、次女みどり。青山墓地に埋葬。

死の苦悶から救われたいとしていたとき、植村正久が見舞に訪れた。植村は彼に「ただ神に祈れ」とさす。しかし独歩は言葉の上だけなら祈れても、心から祈ることができないと泣いた。独歩は折れない自分を救ってくれる人が欲しかった。それは自分以外にないことを悟ったのだ。

このような経緯があつて、死の五日前に弟収二に次のように遺言した。

生や素より好し、されど死亦悪しからず。疾症

は彼岸に到達する階段のみ、順序のみ、又吾生の一事たりと稽ふれば、別に煩悶するを要せず。

死は彼岸に達する努力なり、と悟ったのではあるが、独歩は急に「淋しくなった」と泣いた。

病氣中、「読売新聞」に真山青果による「独歩氏の病状を報ずる書」が連載されていたので、独歩の死には多くの人が涙を流した。このような事情もあって、新潮社は二〇六頁に及ぶ異例のオーロ国木田独歩追悼号を編集した。編集期間が僅か二週間であつたため、取材の殆どが編集者による面談筆記で行われ、それだけに内容は素直である。その一人である夏目漱石は、寺田寅彦に勧められて読んだ「運命論者」について、ストーリーが自分の妻が異父の妹だったという設定であつたことから、「ステイーヴンソンの作のような面白さがある」と言いつつも、「千人中只一人あるか無いかと云うような、最も珍らしい事件を借り、其事件に依つて、人生の或る物を言い現わそうとした」ところが「余り感服することが出来ない」と評した。もし「鎌倉夫人」であつたなら、別の評価をしたに違いない。

家族の談話も素直である。子供の頃から喧嘩坊主で、両手の爪をとき、喧嘩のときは相手の顔をひつかくのでガリ亀と呼ばれていた。キリスト教と一番似合わないのが独歩であつた。治子夫人は「喧嘩が好きで、好きと申すとおかしゅうございますが、まあ好きなのでしょう。外に出ては能く喧嘩をして来る人でありました。時には、電車の車掌などを相手にしたこともあります。人の喧嘩



でも、俺が引き受けると飛び出す方でした」と回想している。独歩は、まことに困った性格で、純情で一本気な文士であり、そのところが愛されたのだ。

## 吉川英治

明治二十五年横浜に生まれる。父真広は小田原藩の下士、母いくは千葉県佐倉の旧藩士で臼井町長山上弁三郎の四女。本名は吉川英次。

小学生時代、近隣の塾で漢学を学ぶ。十歳のとき、時事新報の雑誌「少年」に作文が入選。以来、諸雑誌への投稿少年となる。

父が訴訟事件で敗訴して家運が没落。突然父から小学校を退学せよといわれ、大声で泣く。数日後、関内の印刻店へ蒲団持ちで小僧にやられる。主人が俳人だったことから俳句に興味を持つ。以後、少年活版工、横浜税務監督局の給仕、雑貨店店員、建設現場土工、横浜ドックの船具工。ある日、ドックの作業中に足場もろともドックの底に落ちて人事不省となり、一ヵ月余入院した。当時を振り返る吉川は、

「船渠<sup>ドック</sup>の職工生活の一年半は、忘れられない経験ばかりだった。十八、九の肉体には、毎日がたえ難いほど重労働であった。それに、危険な仕事が多く、一週間に一度や二度は、かならず怪我人や死人を仲間のうちに見るのだった。朝、家を出るたび、夕方、また母や姉妹たちのそばへ帰れるかしら、どうかしらと、家を振り向いては、家を出る癖がついていた」（『雉子郎物語』と語る。

吉川文学が戦前戦後も変らない人気の根元には、庶民の中で育ち、社会の下積みでの苦難苦闘の連続の体験が作品中に生かされている点に特質がある。それは大衆性、教訓性、時代性、またその時々々の社会状況に対応させた状況感覚などにみられる。退院後、青雲の志を抱いて上京した。武蔵が又八と槍一本ひっさげて関ヶ原へかけつけたように、ふところのガマ口には一円六十何銭が入っていた。

吉川は、

「ぼくは、少年期から青年期にかけて、おもわぬ家庭の変り方につかつた為、幸か不幸か、とにかく、幾多の職業と、世の仕々の、うらぶれを早くから知った。

正当な学歴を、順当に通つたよりは、この方が、人生見学にも、習得にも、たしかにぼくを益してくれたし、後の職業などを問わずに、単なる、一箇の人生として、多彩多感で、おもしろかったと思っている」（『焚き反古の記』と述べている。

上京後は、職業を転々としながら投稿生活を送った。

二十九歳のとき、講談社諸雑誌に応募した三作が入選して、計七百余円の賞金が贈られた。丁度、母が亡くなり、賞金は葬儀費に当てられた。

翌年の三十歳のとき、東京毎夕新聞にスカウトされ、社命により新聞小説「親鸞記」を連載執筆する。翌年、処女作「親鸞記」は毎夕出版部から単行本として出版された。

大正十二年九月に関東大震災があり、東京毎夕新聞は解散となったので、作家生活に入った。

大正十三年の三十二歳のとき、講談社の「面白倶楽部」に長編「剣魔俠菩薩」が掲載され、それ

吉川英治時代文庫 14



宮本武蔵(一)

以来各誌から執筆依頼がくるようになって、作家生活に自信をつけた。

翌年には「キング」創刊号より、波瀾に満ちた伝奇ロマン小説「剣難女難」を連載し、比類のない面白さで熱狂的な人気を博した。ほかにも、「面白倶楽部」に長篇「坂東俠客陣」、「少年倶楽部」に伝奇小説「神州天馬俠」を連載した。

大正十五年に大阪毎日新聞に連載した「鳴戸秘帖」は、作家吉川英治を一躍大衆文壇の寵児とさ

せ、それ以来流行作家として各社からの注文が多く、毎日原稿用紙との格闘が始まった。

「鳴戸秘帖」は、阿波蜂須賀二十五万石を舞台に、江戸隠密や旧天満与力をはじめ、追う者、追われる者、それを迎え撃つ者などが、疋巴に入り乱れて展開する伝奇小説の典型である。吉川はその構想を、洋画家・司馬江漢の「春波桜筆記」というエッセイの数行から思いついたという。

司馬江漢が熱海に湯治に行った際、宿の隣の大名の別荘から、毎朝弓弦のひびきが聞こえ、さらに朗々と読書する声が伝わってきた。宿の主人に聞くと阿波藩主蜂須賀侯の屋敷だという。巷の噂では蜂須賀侯は暴政を行ったため譴責をうけ、蟄居を命じられたということだったが、これでは暴君どころか賢君というべきだ、といった疑問を言外にふくんでいる。その記載から、吉川は一大口マンを構築したのである。

吉川の代表作「宮本武蔵」は、昭和十年八月から十四年七月にかけて東西・朝日新聞に連載された。執筆の動機については、直接的には菊池寛と直木三十五の間でかわされた武蔵をめぐる名人論争であったが、吉川は以前から武蔵に関心を持ち、剣禅一如の境地をめざしてひたすら歩むその生き方に、自身の苦難苦闘の生きざまを重ねて共鳴していたからである。

吉川の武蔵像は次の言葉に盡きる。

「剣をとおして、彼は人間の凡愚と菩提を見、人間という煩惱のかたまりが、その生きるための闘争本能が、どう処理してゆけるものか、死ぬまで苦勞してみたんだ。乱麻殺伐な時風に、人間を斬る具とのみされていた剣を、同時に仏光ともなし、

愛のつるぎともして、人生の修羅なるものを、人間苦の一つの好争性を、しみじみ哲学してみた人である」（「随筆宮本武蔵」）

さらにその背景には、時局の緊張が執筆に向わせた。昭和七年に起きた五・一五事件で陸海軍将校による犬養首相暗殺事件に関し、吉川はかねてから抱いていた「真ん中」に位置する大衆の声に注目していた。

「テロリストの投げた凶弾は、政党政治家へ向ってされたのか、民心へ投げつけたのか、いずれにしても、かくされていた一思想の突如とした表示であることだけはたしかだ。……

政治家も、教育家も、また警視庁も、こういう大事件に直面してみると、いかに、永い間民心に對して認識が欠けていたかということがよくわかる。左と右それ以外なものを全く無視していた。いや、無視することさえ知らなかったのではあるまいか」（「真ん中の鳴動」朝日新聞昭和七年五月十七・八日）

そこから青年タケゾウを主人公とした「真ん中」意識の具象化を作品で示すことにあったといわれる。

桑原武夫を中心とした大衆文化研究グループの共同研究「宮本武蔵と日本人」には、当時二十六歳だった甲さんは次のように語っている。

「これは今度で三べんですワ。このごろの小説は変なこと書いてるしもう飽きてるし、やっぱしこんなもののほうがよしいワ。この本読むとなんかこう自分が修養される気になりますネ。なんとなしに読んでるのやけど。この本はつまり武蔵が主人公やけど、又八は又八でべつの道を行く。ひと

りは剣の道に行き、ひとりには悪い女にかかわりおうて墮落してしまふ。そのとこ、よう書いてありますネ。うち（私）、弟あんですけど、いっぺんこれ読んだらええナ、と思う」

菊池寛は、吉川作品について、大衆小説に求められるすべての要素が織り込まれていると評価したが、面白くてためになる作品こそ吉川文学の真髄である。

昭和十四年に完結した「宮本武蔵」を境にして作風が変わった。伝奇小説から歴史小説への転換であり、作品点数も目に見えて減った。

文壇の大家となった晩年の吉川は、国家的事業の意気込みで中国の三国志に並ぶ日本歴史の大口マン作品を描くのが自分に課せられた役目と考えたのではなからうか。「新・平家物語」や「私本太平記」に執念の鬼となつて四つに取り組んだ。

昭和三十五年十一月三日、文化勲章を受章した。過去に紫綬褒章の受章を辞退していたこともあつて、発表に先だつて小林和雄氏が受章の意向を打診した。吉川は文子夫人と相談のうえ、一旦はお断りした。しかし小林氏は、「吉川さん、あなたは読者の多い方だ。あなたが受章されたら読者が喜びますよ」と、重ねてさとされ、吉川も、「読者から頂く勲章なら」と折れて、受章が決まった。

受章が発表されると、全国的一般読者から千数百通の祝電がきた。吉川は文子夫人に、「文子、やっぱりもらつてよかったな」と言つたという。

昭和三十七年九月七日、肺ガンで死去。享年七十歳。遺族は文子夫人、長男英明、次男英穂、長女曙美、次女香屋子。

吉川の末期の症状について、長男英明氏は次の



ように語っている。

「父はもう、まったくといっていいくらいいしゃべれなくなっていたが、周囲の者の言う事はよく理解出来ていたようだった。時々、大きくうなずいたり、かすかに笑ったりした。

しかし、文字に生き、創作に生きてきた父が、自己を表現する言葉を失ってしまったということとは、見ていて胸がしめつけられるほど痛ましかった。まわりの者に、言いたいことがなかなか通じないと、いらだたしげに動かない左の手で、仰向けになった胸の所に紙をおさえ、これも不自由になった右手に鉛筆を握りしめて意を通じさせようとすることもあった。そんな時の父の片仮名が、まるで小学生の書いた字のように、ふるえて、バラバラになるのを見るのは一番辛かった。」（父吉川英治）

吉川は、文子夫人の激励にこたえて、紙と鉛筆を求め、ただどしく、

「ヨクナール」

と書いた。吉川はまだ希望を捨てていなかったが、残念ながら遺言となった。

追悼文では、司馬遼太郎が「不世出の創造力」と題して書いている。

「明治以来、その作品がこれほど多くの人に読まれた作家はいないだろう。人の一生は棺のふたと同じときはじめてわかるというが、吉川さんの訃報に接したとき、ふと、われわれの昭和の文化現象史のなかで吉川英治をもたなかったならば、よほどの部分、荒涼たるものであったらうとおもった。……

吉川さんは宮本武蔵において、いかにも日本的

な求道的な人間の典型を作りあげた。……『鳴戸秘帖』は吉川さんの作家としての地歩を確定した作品だが、同時に、日本の大衆小説の隆盛はここからはじまったといっている。それどころか、この人がもし、英語かフランス語圏にうまれておれば、この一作でデューマを越える評価をうけていただろう。」（サンケイ新聞三十七年九月七日）

## 吉行淳之介

大正十三年、岡山市で作家の父・栄助と美容家の母・安久利との間に長男として生まれる。一家で上京し、淳之介が麻布中学在学中に腸チフスに罹って隔離病棟にいるとき、父栄助が狭心症で急死する。

昭和二十二年、二十三歳のとき、東大英文科を中退して新太陽社に入社する。第十四次「新思潮」の創刊と同時に同人となり、同誌に「星の降る夜の物語」「花」などを発表。

その後の作品で、「原色の街」が第二十六回芥川賞候補、「谷間」が第二十七回芥川賞候補、「ある脱出」が第二十八回芥川賞候補となった。昭和二十八年には会社勤務をやめ、ABC放送の原稿を書いて生計をたてた。

昭和二十九年「驟雨」で芥川賞を受賞、左肺区域切除の手術を受け、授賞式を欠席。退院後、病床に伏しながら作家生活に入った。その後、体力不足で一日に二、三枚ずつ小刻みに書いた。小島信夫、庄野潤三らと、第三の新人と呼ばれた。

遺言は、長年のパートナーとなる宮城まり子（本

名本目眞理子）氏と暮らし始めて九年目に書かれたものである。

平成六年七月二十六日肝臓がんで死去。享年七十。遺族は文枝夫人、長女麻子。

親族は、美容家でNHKの連続テレビドラマ「あぐり」の主人公である母親の吉行安久利（あぐり）、妹で新劇女優の吉行和子、芥川賞作家・詩人の吉行理恵の三人である。

## 遺言書

遺言者吉行淳之介は、この遺言書によって、左の遺言をする。

一、遺言者の有する全著作権の貳分の壹の持ち分を、東京都世田谷区上野毛本目眞理子に贈与する。  
二、葬式は、本目眞理子を喪主として、右上野毛所在の同人の家で、無宗教で行うこと。入口で会葬者に花を渡し、会葬者がその花を遺言者の写真の前に置くようにすること。  
三、東京都千代田区大島重夫を、遺言執行者に指定する。

右遺言のため、遺言者みずからこの証書の全文を書き、日附および氏名を自書し印を押した。

昭和四十四年十二月八日

東京都世田谷区上野毛

遺言者 吉行淳之介 印

遺言書は自筆証書遺言の方式に忠実に沿って作成されている。

この遺言の主眼（作成の動機）は、パートナー

として連れ添って暮した宮城まりこ氏に主たる遺産である著作権の二分の一（配偶者の法定相続分割合相当）を遺贈することと、葬儀の喪主に指定することであったように読み取れる。また遺贈の履行を確実なものにするため弁護士を遺言執行者に指定している。

著作権を構成する作品の代表作といえは「生と性」を追求した「原色の街」「驟雨」「娼婦の部屋」といった売防法施行以前の鳩の街、新宿二丁目を

管のなかでは、赤いネオンがふるえている。洋風の家の入口には、ピンク色の布が垂れていて、その前に唇と爪の真赤な女が幾人も佇んでいる。人目を惹くようにそれぞれの思案を凝らせた衣裳にくるまって、道行く人に、よく光る練り上げた視線を投げている。鼻にかかった、甘い声が忍びよってゆく。なかには、正面から抱きついて脂肪のたまった腹部をすりよせながら、耳もとで露骨な言葉やささやく女もある。」

遺言執行者に指定されている弁護士の大島重夫氏は弁護士会で著作権紛争解決幹旋委員会の委員で著作権の権威者である。吉行氏と同じ大正十三年生れである。もしかしたら、どこかの出版社から紹介されたのかもしれない。

なぜ、これほどの弁護士をわざわざ選んで遺言執行者に指定しなければならなかったのか？ 法的な観点からすればそれだけのワケがあるのだ。著作権という権利を相続人以外の者に遺贈する場合の相続実務においては、相続人全員の同意が必要となるが、当然、同意が得られないケースも起りうる。

しかし、遺言執行者が指定されている場合には、遺言執行者の同意だけで足り、遺言が確実に執行されることになる。しかも著作権実務に通じた弁護士であれば手続の相手方となる出版業界に「顔」があり、相続手続を円滑に取り運んでもらえるものとする強い期待があつてのことだろう。

受遺者の宮城まりこ氏といえは水兵服を着て「カモメの水兵さん」を歌い踊っているテレビの画面を思い出す。掛川にある「ねむの木学園」の園長先生である。映画「虹にかける子どもたち」、

著書「ねむの木の子どもたち」など幅広く活動されている。

葬儀の作法についてこだわりの遺言をしている。子供の頃から喘息で苦しみ病臥する日が多く、常に死と向き合っていたからだろう。この作法については、何となく氏のダンディズムが感じられる。森鷗外の長女で小説家・随筆家の森茉莉氏は「広い野原の中の吉行淳之介」の中でこんなことを述べている。

「或日、吉行淳之介の応接間にあると彼が、応接間と次の間とが続いた部屋と、台所との堺の暖簾の間から、片方の肩から先に流れるやうに、するりと入って来た。部屋に入ってくるのに、かういう風に入ってくるのは私の黒猫ジュリエット以外は吉行淳之介一人である。」

五十五歳のときにベストドレッサー賞を受賞している。スマートでダンディな文人であつた。

追悼では、水上勉が「吉行さん追悼」と題して書いている。

「私は妻に逃げられ、三歳の子とふたりで農家の

## 原色の街・驟雨

吉行淳之介



新潮文庫

離れにいたのだが、読物雑誌に原稿を持ち込んで喰おうとしていた田舎者であった。私は年だけは四つ上だったのに、なぜだか、吉行さんの都会的な風貌骨格に魅せられていて、原稿をもちこみつづけたのも、吉行さんから、おもしろいものが出たらもってきなさい、といわれていたからだと思う。……

私は、自分の（二度目の）妻の働き先（サロンM）へ、何とか吉行さんをつれて行ったのである。いまから思うと、どうして吉行さんがそんなに私たちに関心をもたれていたのか、これも不思議だ。私は、友人の少ない方で、若狭から肺病を抱いて上京し、文学文学といっくらし、……あの時代を、才能もないままに、ちびた下駄ひきずって東京をうろつき、カストリ焼酎で夕方から酔いしれていた仲間が多いのだが、吉行さんとは普通の知人が多くて、通俗小説を志望している私などにも寛容なところがあったのかと思う。

吉行さんに『やあ、やあ』というくせがあった。『やあ、やあ』の裏にいつぱいこまれたものがあつたように思う。どこであつても「やあ、やあ」であった。呑み屋でも、バアでも、パーティ会場でも、人づきあいには寛容だったと思うけれど、こと文章表現となると、曖昧な一字を見逃さない炯眼（けんがん）があつて、きびしかった。そういう友人に畏敬の思いのため、ずうっと「やあ、やあ」といわれて、黙って、その裏側を噛みしめてきた。いまもそうだ。」（水上勉全集第十六巻）



#### 木内是壽

きうち よしひさ

1935 年生まれ

早稲田大学法学部卒業

日本興業銀行定年退職後に文学業をスタート

2003 年 遺産相続 13 話の短編小説集『相続百景』（文芸社）を刊行

「新潮 45」（2003 年 9 月号）に遺産相続記事「相続百景」が掲載される



## 小説集 火の闇 小浜清志

沖縄は溢れる光が死と闇を内包している。光の中に見る死とは何か。中上健次文学を引き継ぐ作家小浜清志の力作小説集。「すばる」に発表された作品を収録。

発行所 集英社